

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

平成21年10月30日

財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科： 人間・環境学研究科

職 名・学 年 博士課程2年

氏 名 神 本 秀 爾

事業区分	平成19年度・長期派遣助成	
研究課題名	ジャマイカ、ラスタファリ運動の再編に関する文化人類学的調査	
受入機関	ジャマイカ、西インド諸島大学モナ校 (University of the West Indies)	
渡航期間	平成20年6月21日～平成21年7月27日(内273日間;詳細は添付書類に記載)	
成果の概要	タイトルは「成果の概要/報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 有(1点)	
会計報告	交付を受けた助成金額	2,550,000円
	使用した助成金額	1,950,000円
	返納すべき助成金額	600,000円
	助成金の使途内訳 (使用旅費の内容)	渡航費 150,000円
		滞在費 1,800,000円

平成19年度海外長期派遣助成報告書

「ジャマイカ、ラスタファリ運動の再編に関する文化人類学的調査」

京都大学大学院 人間・環境学研究科
博士後期課程 神本秀爾

以下に、日程、成果を報告する。

< 日程 >

* 助成決定後の計画変更で、平成20年6月5日～平成21年6月4日の滞在としたが、再度変更をおこない、273日間の滞在となった。詳細は以下の通りである。

平成20年6月21日～平成20年8月13日(54日)

平成20年10月31日～平成21年3月6日(127日)

平成21年4月27日～平成21年7月27日(92日)

と の間の帰国理由は、祖母の健康不良のため

と の間の帰国理由は、引越しおよび研究会参加のため

< 成果 >

本調査は、西インド諸島ジャマイカ国の首都キングストンに位置する西インド大学モナ校を研究拠点として、フィールドワークをおこなった。本調査が対象としたのは、1930年にはじまった宗教運動であるラスタファリ運動である。本調査の目的は、同運動の1990年代以降の再編過程を明らかにすることであった。以下に同運動に関する若干の説明を述べた後、本調査の成果を述べる。

調査地・調査対象の概要

ジャマイカの人口のほとんどは、16世紀以降スペイン、イギリスによって大西洋をわたって西アフリカから連れてこられた奴隷の子孫である。ラスタファリ運動とは、従来のキリスト教を「白人中心であり、黒人を隷属状態においておくためのもの」として糾弾し、聖書に対抗的な再解釈を加え、自らを「真のキリスト教」とも称するものである。

ラスタファリ運動は、1930年にエチオピアで皇帝ハイレ・セラシエ(幼名ラス・タファリ・マコネン)が即位したことに端を発している。同運動は、セラシエをメシアとして崇拜すると同時に、父祖の地アフリカ大陸への帰還を要求するものとして、非組織的な布教を介して広まった宗教運動であるといえる。現在に至るまで、主な担い手は貧困層である。運動自体は非組織的ではあるが、その信仰の内容から、エチオピア・アフリカ黒人国際会議派、イスラエル十二氏族派、ナイヤビンギ系諸派に大きく分けることが可能である。なお、1970年前後までラスタは「精神病者」「カルト」などとして周縁化・排除される存在で

あったため、数的な変化などは不明である。1982年の国勢調査になってはじめて、「宗教」の項目にあらわれるようになった。2001年の国勢調査では、人口のおよそ0.93%にあたる24,020人がラスタであると申告している。2000年代に入り同三派を中心として10グループ前後の参加によって、「ミレニアム会議」や「世界ラスタ・コミュニティ」などラスタ諸派間の連合的組織も次々と結成されている。

本調査の内容

本調査では、1950年代中期にキングストンで結成されたエチオピア・アフリカ黒人国際会議派（信徒数およそ200名、以下会議派）、1998年にキングストンで結成されたスクール・オブ・ヴィジョン派（信徒数およそ200名、以下SOV派）を主な対象とした。会議派は、創設者でありリーダーであるプリンス・エマニュエルを崇拜する点において、大きく他宗派とたもとを分かっている。SOV派は、その信仰においてナイヤピング系と位置付けることが可能である。

予備調査を経て両者を対象とすることを決定したのは、以下の理由による。第一に、会議派は1990年代のリーダー、プリンス・エマニュエルの死を経て信徒の「脱中心化」「個人化」が進んだものの、現在も宗派自体は存続しているため。なお、会議派は報告者の修士課程時の調査対象であるため、ラポールはすでに確立されていた。第二に、SOV派は、米国への出稼ぎから帰ってきたデルモット・ファーガンによって新たに設立された宗派であり、現在積極的に活動をしているため。イスラエル十二氏族を調査からはずしたのは、実質的に活動停止状態にあったためである。

本調査の目的は、1990年代以降のラスタファリ運動の再編過程を明らかにすることであったが、そのために、以下のような問いを立て調査を実施した。それは、「信仰の内容において異なる宗派間において、人びとはどのように宗派を選択するのか」「宗派選択は時代的・社会的背景とどのように関係しているのか」の二点である。以下に、第一・第二の問いに対して得られた回答を簡潔に述べる。

宗派選択に関しては次のようにいえる。ラスタファリ運動はローカルなコミュニティに基盤を持たない運動であるため、キリスト教のような組織的布教をおこなうことは不可能であり、また、血縁を通しての信仰の継承もあまりおこなわれていない。つまり、出現後80年を経ているにもかかわらず、信徒の多くが「第一世代」なのである。信徒たちは、往々にして「偶然の出会い」「人づて」でそれぞれの宗派に所属するに至っていた。このことが意味するのは、信仰の継承自体も「偶然の出会い」「人づて」でおこなわれるということである。とはいえ、時代的・社会的背景の変化が個人の宗派選択に大きな影響を与えている。

会議派は、1990年代中期以降、レゲエ・ミュージシャンが続々会議派に入信し、彼らが商業的成功をおさめたことから、その認知度が上がり訪問者や信徒が増えた。しかし、宗派は常に排他的なコミットメントを信徒に要求できるわけではなく、信徒はその宗派・組織の境界を横断しながら、個々にラスタとしての生を生きてもいる。会議派を一躍有名にしたミュージシャンのSIZZLAは2000年代に入って、会議派、ナイヤピング系諸派の折衷を目論んでおり、両派の様式を折衷した礼拝堂をつくってもいる。しかし、その動きは運

動全体の折衷に向かうことなく、結果的に現時点では SIZZLA 派とも呼べる新たな集団の形成の方向に向かっているⁱⁱ。

SOV 派は信仰においてはナイヤビンギ派を自称しているが、元々はジャマイカで多数派であるナイヤビンギ系諸派へのデルモット・ファーガンの違和感・対抗心を結成のきっかけともしていた。しかし、SOV 派の存在感が国内で確立されたことを機に、2007 年より安息日を中心としてナイヤビンギ系の中心的集団との交流を開始している。この SOV 派の方向転換は時期的にも前述のラスタ連合的組織結成の動きと機を一にしている。しかし、このような宗派・組織単位での動きは、SOV 派信徒として信仰に目覚めるといふ意味での信徒の再生産とはほとんど関係がないことも信徒への聞き取り等から分かった。

本調査で得られた知見

本調査から得られた知見について以下に述べる。ラスタファリ運動自体は現在も非組織的布教・信仰継承を元に信徒を再生産している。信徒たちの宗派選択は往々にして「偶然の出会い」「人づて」によるものであるが、信仰として強固なものである場合が多かった。SIZZLA による折衷の試み、SOV 派の例に見られた宗派連合への参加の試みは、それぞれ「信仰の折衷」「運動の折衷」の試みと区別することができる。

「信仰の折衷」はあくまでもカリスマを中心とした個人レベルでおこるものであるが、このような折衷も当然のように時代的・社会的背景に影響されている。SOV 派の例で示したような「運動の折衷」は、個々の信徒間での連合を促すものというよりは、リーダーが代表する組織レベルにおいて重要視されているものであった。

本調査が示唆するのは、信徒レベルでの「信仰の折衷」、組織レベルでの「運動の折衷」が相互に関係しながら運動を継続させているということと、そのなかでカリスマ的個人を中心とした宗派の形成や信徒集団の盛衰も起きており、まさにそこに運動のダイナミズムがあらわれているということである。若干の補足調査も必要となるが、1990 年代以降のラスタファリ運動の再編について本調査を終えた時点での暫定的な結論は、運動の草創期を知るラスタたちの減少が、「信仰の折衷」「運動の折衷」を加速させたというものである。

なお、本調査で得られた知見をもとに学会発表・論文発表を順次おこなっていく予定であり、その成果は報告者の博士論文の一部として重要な位置を占めるものとなる。

ⁱ ジャマイカのポピュラー音楽でありながら、世界的にも流通している音楽。会議派に近いレゲエ・ミュージシャンたちは独自の音楽スタイルをも確立し、現在はそのスタイルは広く他のラスタのミュージシャンも採用している。

ⁱⁱ 彼は現在、世界でも有名なラスタのなかのひとりであり、彼の活動をグローバルな文脈での運動の再編という視点から捉える必要もあると考えられる。